沢登切子
山梨に伝わる350年の和紙工芸

マジョ・ルチア
山梨県国際戦略・自然首都圏推進課
国際交流員

去年の11月、東京から遊びに来た友人に、私が山梨で気に入っている場所をいくつか案内して回りました。その中でも外せなかったのが、太宰治が名作『富嶽百景』を執筆したことで知られる歴史ある峠の茶屋、「天下茶屋」です。そこで私たちは　、**吉田さん**という女性に出会いました。

茶屋はいつものように賑わっていて、私たちはあるお二人連れの女性と相席になりました。それがきっかけで、自然と会話が始まったのです。最初は「どこから来たの？」といった何気ない世間話から始まったのですが、気づけば話題は**「切子（きりこ）」**のことへ。実はこれ、地元・山梨の人でも知る人が驚くほど少ない伝統工芸なのです。私が切子を知ったのは、本当に偶然のことでした。1年前、山梨県知事が海外のパートナーの方々へ贈り物として切子を用意された際、その解説文の翻訳を任されたのがきっかけだったのです。

日本で「切子」といえば、多くの人は大阪の有名なガラス工芸「天満切子」を思い浮かべるでしょう。しかし、山梨の切子はすべて「紙」から生まれます。350年の歴史を持ち、「無形民俗文化財」にも指定されているこの工芸は、南アルプス市の沢登（さわのぼり）地区に伝わるものです。メキシコの切り絵「パペル・ピカド」のように、重ねた薄い和紙を**「つきのみ」**と呼ばれる特殊な彫刻刀で丹念に「彫って」いきます。

2025年度 切子作品
（提供：切子保存会）

出来上がった透かし模様の美しさから、地元では今でも「おすかし」とも呼ばれています。切子は単なる美術品ではなく、五穀豊穣や子孫繁栄を願う宗教的な役割も持っており、一年間の集大成として、毎年10月13日に**「六角堂切子祭り」**が開催されます。

驚いたことに、吉田さんは長年の切子愛好家であるだけでなく、**「切子保存会」**のメンバーでもありました。あの出会いから数ヶ月後、彼女は私を2025年の第1回初心者講演会に誘ってくれました。ちょうどカナダから母が遊びに来るタイミングと重なり、新しいことに挑戦するのが大好きな母は、来日した翌日に私と一緒に切子作りに挑戦することになったのです。

講演会の会場は、桃や桜の果樹園に囲まれた地元の公会堂。そこには、本当に穏やかで素敵な空気が流れていました。さらに感動したのは、吉田さんの心遣いです。私たちの名前を漢字でデザインした、ミニチュア切子のキーホルダーをプレゼントしてくれたのです。一ヶ月も前に名前を聞かれたのは、このサプライズのためだったんだ……と、その準備の細やかさに胸が熱くなりました。作業の合間に母が言った、「まるで紙でレースを作っているみたい」という言葉。それは、この工芸が持つ魔法のような繊細さと美しさを、何よりも完璧に言い表していました。

製作は、習字紙に使われるB4サイズくらいの和紙を10枚から15枚ほど重ねることから始まります。ここで鍵となるのが紙選びです。伝統的に使われるのは、岐阜県美濃市で1300年以上の歴史を誇る**「美濃和紙」**。なかでも特に薄い種類が選ばれます。楮（こうぞ）を原料とするこの和紙は、薄くても非常に丈夫で、時が経つほどに白さが増し、光にかざすと優しく透き通ります。「繊細さと強さ」という相反する性質を併せ持っているからこそ、何枚も重ねた紙を一気に彫り抜くことができ、かつ複雑な作業中でも破れることがありません。その美しさと機能性の高さは、なんと高級なウェディングドレスの素材に使われるほどなのです。

図案が決まり、それを一番上の紙に固定したら、いよいよ**4月**の初めから「彫り」の工程に入ります。使うのは「つきのみ」という刃物。細いものはわずか0.5mmという繊細さで、驚くことにこれらは職人たちの手作りです。鉄のこぎりの刃を、自分好みの幅や長さになるまで丹念に研ぎ出して作ります。作り手は、デザインに合わせて3～5種類の刃を使い分けます。日本の蒸し暑い夏の間、湿気から紙を守るために、作業の合間には新聞紙で包んで大切に保管します。

「彫り」の作業が本格的に熱を帯びてくるのは、9月に入ってからです。作り手の多くは本業を持っているため、仕事の前後の時間を見つけては、コツコツと作業に励みます。なかでも印象的だったのが、公式のドキュメンタリー映像で見たある焼き鳥屋さんの姿です。お客さんのいない合間を縫って、一心不乱に切子を刻んでいるのですが、その光景がなんとも微笑ましくて。完成した作品からは、もしかして香ばしい焼き鳥のいい匂いが漂ってくるんじゃないかしら……なんて、思わず想像してしまいました。

その後の講演会には、「人数が多いほうが楽しい」と考え、何人かの友人を誘いました。最初は少し不安もあったんです。私たちが**沢登**の人間ではないだけでなく、見た目からして明らかに「外」から来た、いわば究極のよそものたちの集まりだったからです。しかし、その心配はすぐに消え去りました。皆さんはとても温かく迎えてくれ、私たちが切子を学ぼうとする姿を喜んでくれました。切子歴17年のベテランである吉田さんや、長らく地域住民として携わってきたたかねさんは、頻繁に私たちの作業場に立ち寄っては、温かい励ましや的確なアドバイスをくれました。

夕方になると吉田さんのお孫さんたちも練習にやってきました。公会堂に流れるその心地よいコミュニティ感は、私にとって非常に新鮮なものでした。

どこから話が伝わったのか、第二回の講演会の際に、**山梨日日新聞**の記者が取材にやってきました。初めて切子に挑戦する外国人のグループが珍しかったのでしょう。一週間後、同僚や日本人の友人が「新聞に載っていたよ！」と記事を送ってくれました。紙面の『外国人が切子に挑戦』という見出しを見て、私は思わずクスッとしてしまいました。日本では「外国人が○○をしてみた」という話題がよくニュースになりますが、それって、海外の人にとって「ごく普通の活動でも、日本でやってみた」ことが特別な魅力を持って映るのと、どこか似ているのかもしれませんね。

外国人が「切子」に挑戦

南ア・保存会講習で作品制作

切子のデザインや作り方を学ぶ参加者ら ＝南アルプス市沢登

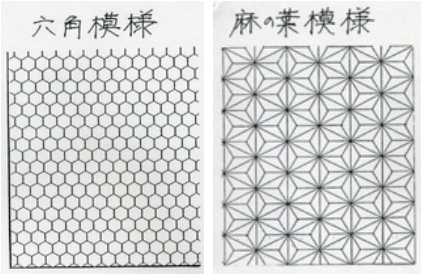
山梨日日新聞の記事

毎月、沢登公会堂で開かれる講演会に通うことは、いつの間にか私と友人たちにとっての楽しい恒例行事になっていました。講演会の前には新しいランチのお店を探し、近況を報告し合うのが定番でした。こうしたランチを通じて**南アルプス市**の魅力を再発見していくのは、とても素敵な経験でした。ずっと夢見てきた「美術館の講座後、地元のデニーズに集まって、たまにはおしゃべりを楽しむ、幸せそうな日本の退職女性たち」の仲間入りを果たしたような気がしました。

講演会の合間の自由時間を使って、2ヶ月かけてデザインを練り上げました。最初は「西洋のテイスト」を取り入れてみようと、アルフォンス・ミュシャの作品をモチーフにすることを考えました。19世紀、ミュシャをはじめ多くの画家が日本美術の影響を受けたことを踏まえれば、あえてミュシャを題材に選ぶのは、面白い「逆転の発想」になると思ったのです。しかし、いざ試行錯誤を始めてみると、ミュシャの繊細な絵を「切子」の形式に落とし込むのは、想像以上に難しいことが分かりました。

そこで、伝統的な手法に立ち返ることにしました。地元の六角堂にも見られる**「六角（ろっかく）」**や**「麻の葉（あさのは）」**といった必須の紋様もしっかり組み込むことにしました。県立図書館で伝統紋様を調べてみると、関連する資料が驚くほど充実しており、波、菖蒲（あやめ）、菊、竹、蓮など、お気に入りの図案をいくつも書き留めました。また、過去の作品アーカイブを見るうちに、虫や動物といった「生き物」をモチーフにした作品に強く惹かれている自分に気づきました。そこでミュシャに代わる案として浮かんだのが、生き物を描いた**「浮世絵」**をアレンジすることでした。特に、葛飾北斎が日常をコミカルに描いた『北斎漫画』のような、遊び心のある世界観を取り入れたいと考えたのです。

そんな時に出会ったのが、**歌川国芳**の『かゑるづくし』でした。そこに描かれたカエルたちは、かっこよくて、ユーモラスで、驚くほどダイナミックでした。他の参加者の中には、切り貼りしてコピーをとるアナログな手法の方もいましたが、私はiPadを使ったデジタルな方法を選びました。まず国芳のカエルをすべてトレースし、そこに蓮や竹、菊、そして必須の麻の葉と六角紋様を加えていきました。吉田さんは刃の幅に合わせてミリ単位で図案を調整すると仰っていましたが、その域に達するにはまだまだ修行が必要です。



（右）六角文様
（左）麻の葉文様
（提供：切子保存会）

デザインが完成すると、吉田さんがそれをB4用紙に印刷し、15枚重ねた和紙の上に8本のピンでしっかりと固定してくれました。それからは、すっかり「切子中毒」になってしまいました。ほぼ毎朝、仕事の前の時間を使って作業に没頭する日々が始まりました。集中力を切らさないために、一度の作業は2時間以内に収めるのが良いとされていますが、週末になるとついついその制限を忘れて没頭してしまうこともありました。ポッドキャストやドキュメンタリー、音楽を流しながら作業をしていると、時間はあっという間に過ぎ去ります。ふと顔を上げると、すっかり日が暮れていて、首がカチコチに固まっていることに気づく、なんてこともしばしばでした。切子には、どこか**瞑想**にも似た、精神的な深みがあるように感じます。それは、非常に日本らしい性質と言えるかもしれません。この作業は、常に自分の限界を意識することを求めてきます。疲れに任せて無理をすれば、たった一度の彫り損じが作品全体を台無しにしてしまうからです。「成功は急いで手にするものではなく、正確で意味のある小さな動作を、辛抱強く積み重ねた先にある」ということを、切子は教えてくれます。

いよいよ9月になり、追い込みの時期がやってきました。月初めにようやくデザインを書き上げた友人の一人は、完成させるために連日夜中の12時過ぎまで作業に打ち込んでいました。ある夜、私は思い立って友人二人を家に招き、一緒に切子をすることにしました。ピザを注文し、夜中までひたすら彫り進める私たちの足元には、彫り抜かれた小さな切子くずの紙片がまるで人工の雪のように散らばっていました。

そしてついに、**10月11日**の提出日がやってきました。その日はみんなギリギリまで作業をしていたため、いつもより少し遅れて公会堂へと向かいました。会場に到着して名前を書き、番号を割り当てられます。ここで初めて、紙を固定していたピンが外され、作品の全貌が姿を現しました。重なった和紙のうち、上の10枚は奉納用として預け、残りの5枚が友人や家族に配る用として手元に戻ってきます。奉納する分の和紙は紐で綴じられ、隣の部屋のテーブルにずらりと並べられました。数ヶ月もの間、それぞれが家でコツコツと作り上げてきた地域の方々の作品を一堂に目にするのは、本当に嬉しい瞬間でした。どの作品も構成や細工が驚くほど凝っていて、来年ぜひ挑戦してみたいと思うようなデザインのアイデアや技術の宝庫でした。

翌日、自分たちの作品がどんな風に評価されているのか、期待に胸を膨らませて再び公会堂へ向かいました。私たちの作品を見つけるのは、そう難しくありません。すべてカタカナで書かれた名前を探せばいいだけですから。並んだ作品に見入っていると、入り口のあたりで賑やかな声が聞こえてきました。「焼き鳥屋さん」の登場です。

金ちゃん2025年の作品

金ちゃん2021年の作品

彼の本名は浅川金蔵さんといいますが、みんなからは**「金ちゃん」**という愛称で親しまれています。金ちゃんに会うのは、まるで地元の有名人に遭遇したような気分でした。金ちゃんと彼の作品に対する皆さんの深い愛着は一目で分かりました。誰もが彼の最新作をひと目見ようと、その周りに集まっていたからです。完璧主義者の彼は、提出した後もわざわざ作品を持ち帰り、納得がいくまで「手直し」をしていたそうです。今年の彼の題材は、七福神のうちの二柱、恵比寿様と大黒天様でした。金ちゃんは、二次元の紙の芸術に驚くほど表情豊かで立体的な、命の宿ったような躍動感を与えることで知られていますが、今回の神様たちも例外ではありませんでした。金ちゃん本人と同じように、神様たちは慈愛に満ちた笑顔を浮かべた、とても陽気な姿をしていました。しばらく彼とお喋りをした後、光栄なことに私の作品についてもアドバイスをいただくことができました。どうやら、麻の葉と雲の模様をもっと取り入れれば、さらに高評価が得られたようです。私は来年の作品に向けて、その助言をすぐにメモしました。

後で吉田さんが面白い秘密を教えてくれました。実は、金ちゃんの作品は本当に焼き鳥の匂いがします！審査を公平にするために名前は伏せられているはずなのに、審査員には匂いだけでどれが金ちゃんの作品かバレてしまうそうです（笑）。

ついに祭りの当日、**10月13日**がやってきました。私と友人たちが公会堂に到着すると、ちょうど子供たちが担ぐお神輿（みこし）が、六角堂に向かってゆっくりと進んでいるところでした。お神輿のパレードのほかにも、子供向けのゲームやパフォーマンス、屋台などが並び、さらには地域住民のための福引きまで用意されていました。特賞はなんと「お米20kg」。今の物価高を考えると、かなり豪華な景品です！

こぢんまりとした六角堂の中には、皆が作った切子が整然と美しく飾られていました。あんなにたくさんの応募作品がすべて堂内に収まったのには驚きました。土曜日に作品を見て以来、素晴らしいなと思っていた作者の方々にも直接会うことができ、とても楽しいひとときでした。ある方は、祭りが終わるとすぐに来年のデザインを考え始めるのだと教えてくれました。私も来年に向けて、その姿勢を見習おうと思います（笑）。

数時間が過ぎ、お坊さんが到着すると、地域の方々と共に祈祷が始まりました。日が沈み始める頃、堂内の柔らかな光に照らされた切子たちは、いっそう生き生きとした表情を見せ始めました。山梨のこの小さな区で、心地よい音楽が流れ、自分たちが丹精込めて作り上げた作品が、堂内を吹き抜ける風に優しく揺れている。遠くには大きな**富士山**が、まるでこの祭りを祝福しているかのようにそびえ立ち、それは本当に幻想的な光景でした。

1975年に**無形民俗文化財**に指定されて以来、切子保存会は切子細工の普及と保護に熱心に取り組んできました。1987年には南アルプス市立豊小学校に**「切子クラブ」**を設立し、現在も児童への指導を続けています。また、各地のイベントへの参加や体験コーナーの設営、展覧会の開催などを通じて、新たな担い手の育成にも力を入れています。

しかし、こうした努力の一方で、この伝統も日本各地の地方工芸が直面している存続の危機にさらされています。その危機は道具にまで及んでいます。私が新しい「つきのみ」を購入しようとした際、それを作っていた職人さんが亡くなったことを知りました。現在の作り手たちは、道具を自ら鍛造するか、仲間の作家から特注品を譲り受けるしかないのが現状です。

和紙そのものも危機に瀕しています。美濃和紙の現状が、その衰退を物語っています。1300年以上の歴史の中で、かつては5000軒もの家々がその生産を支えていましたが、現在残っている工房は30軒足らずです。さらに、この危機は気候変動によって加速しています。かつて地域の工芸に多様な特色をもたらしていた**生物多様性**が失われつつあり、日本の伝統に不可欠な素材が絶滅の危機にさらされているのです。天然素材は、切子をはじめとする芸術の道具や技法のインスピレーションの源です。現在、全国の自治体は市民への啓発イベントを主催し、日本の伝統的な和紙作りを支える里山の保護を推進しています。

切子を守る取り組みは、単に伝統的な技法を次世代に繋ぐことだけが目的ではありません。それは、何世紀にもわたってこの地で切子が担ってきた役割——すなわち、地域の**「生きたアーカイブ」**としての記憶を守ることでもあるのです。

2021年に放送された山梨放送（YBS）のドキュメンタリー番組は、その歩みを「江戸時代初期から350年以上にわたって続いてきた切子は、時代を移す鏡でもありました」と美しく表現しています。実際、公会堂を彩る歴代の作品には、第二次世界大戦の兵士の姿や、結婚・出産の喜び、地域の歴史、そして先祖への追悼など、数世代にわたる人々の営みが鮮やかに刻まれています。

こうした「分かち合い」の精神は、切子の奉納そのものに深く根ざしています。切子はプロのための工芸でもなければ、売り買いされる商品でもありません。それは「贈り物」なのです。自分が彫り上げた15枚のうち、出来の良い10枚を奉納します。そして祭りの最後には、その切子が降ろされ、観音のお札や供物と共に沢登の全世帯へと配られ、最後の祝福となります。

デジタル時代を生きる私たちは、限りない**「繋がり」**を手にしているようでいて、実は最も大切な繋がりを見落としがちです。それは、自分が暮らす地域や、自分を育んでくれる土地との絆です。切子は、コミュニティも自然環境と同じように「生き物」であることを思い出させてくれます。それは絶え間ない行動と愛情によって築かれ、守り抜かれていくものなのです。